

沖縄赤十字病院

症例番号3

1. 細胞診判定

①左耳下腺腫瘍：Negative

②左鎖骨部腫瘍：**Positive**

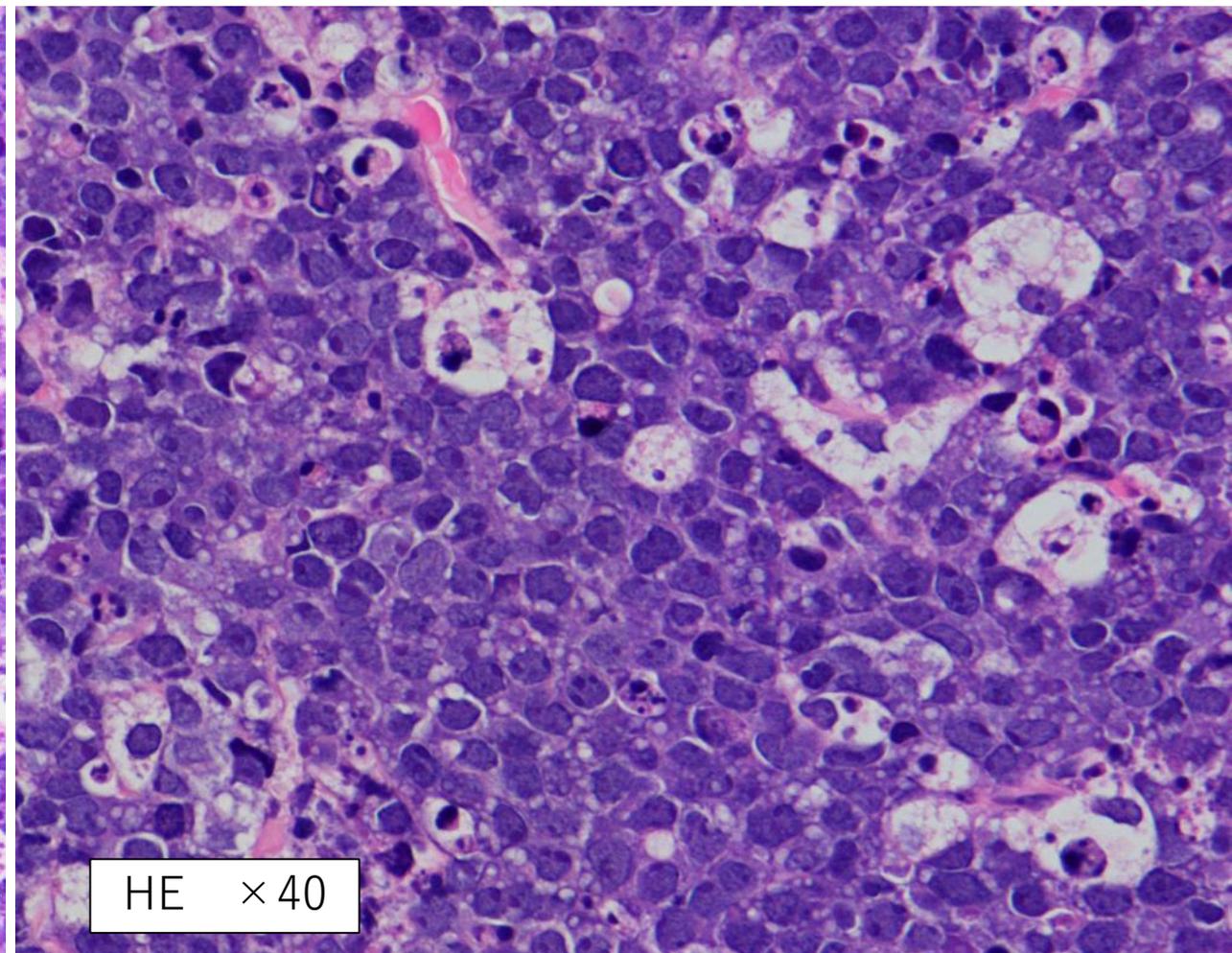
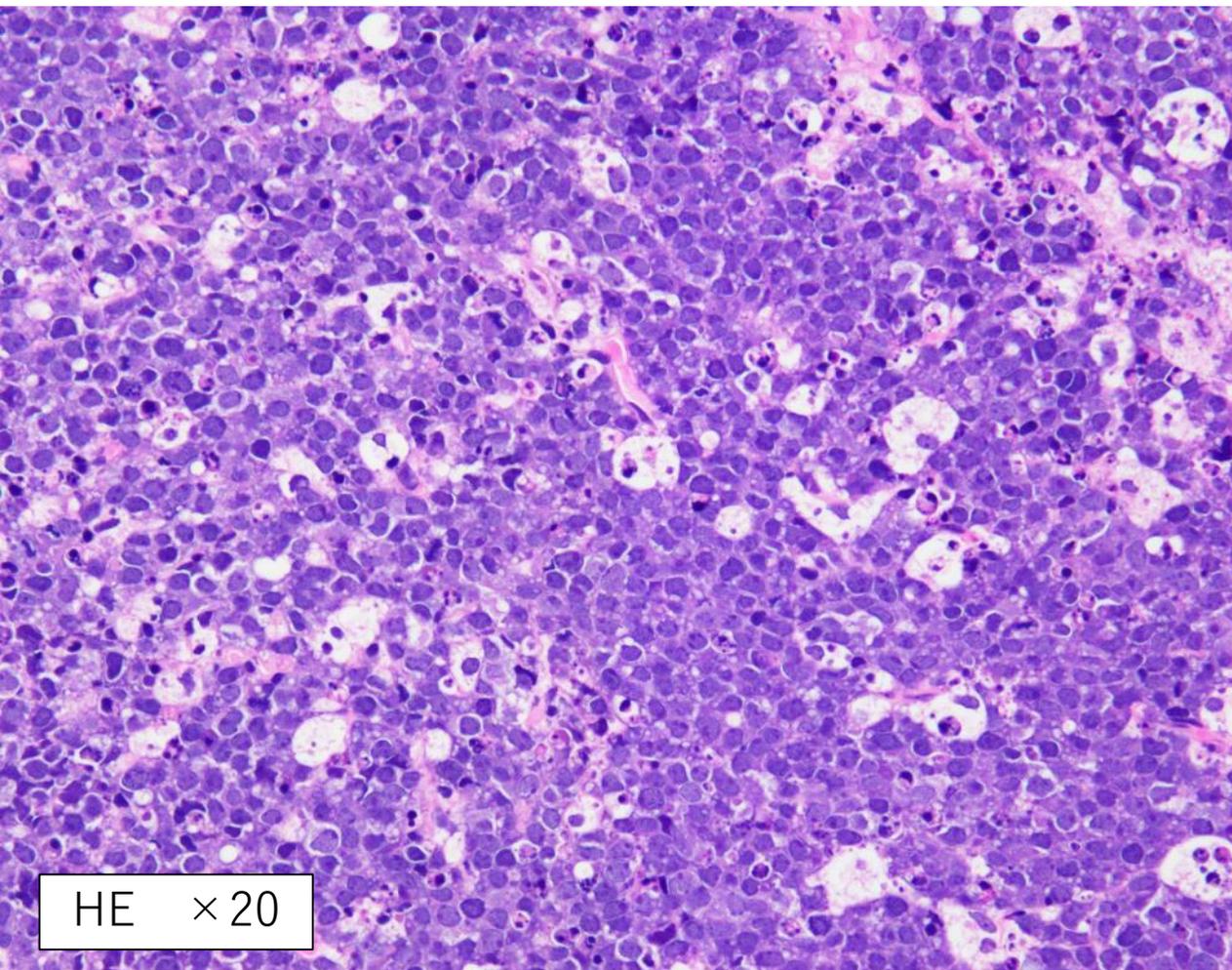
①：異型に乏しいリンパ球を背景に、厚みのある好酸性の豊富な細胞質をもつ上皮細胞集塊を認め、第一にワルチン腫瘍を推定した。

②：核小体が目立ち、N/C比の大きい細胞が孤在性に出現し、結合性は見られない。中型でクロマチンに富んだリンパ球系と思われる細胞が、モノクローナルな増殖を示した。第一に悪性リンパ腫を鑑別にあげ、耳下腺にも腫瘍があるため、低分化な癌や肉腫との鑑別も要した。

2. 組織診断：**Burkitt lymphoma**

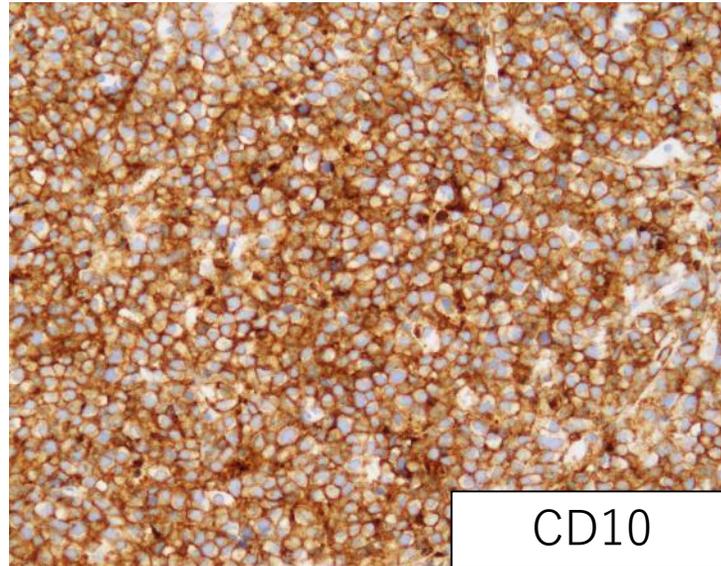
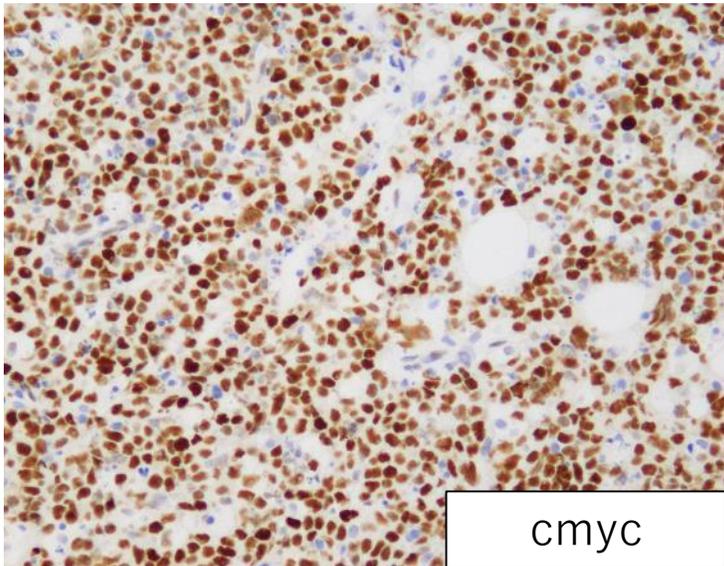
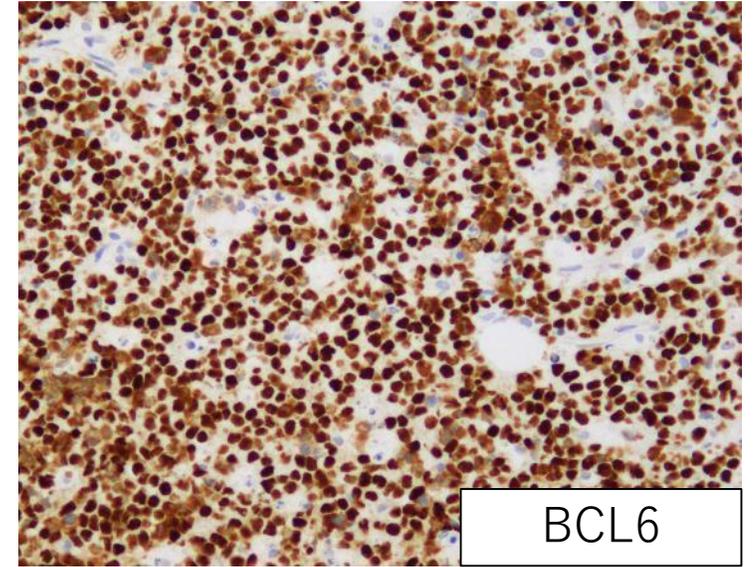
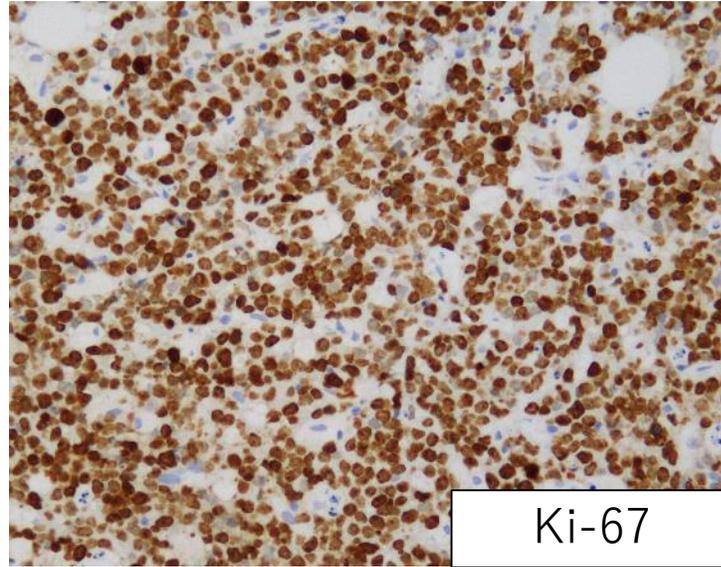
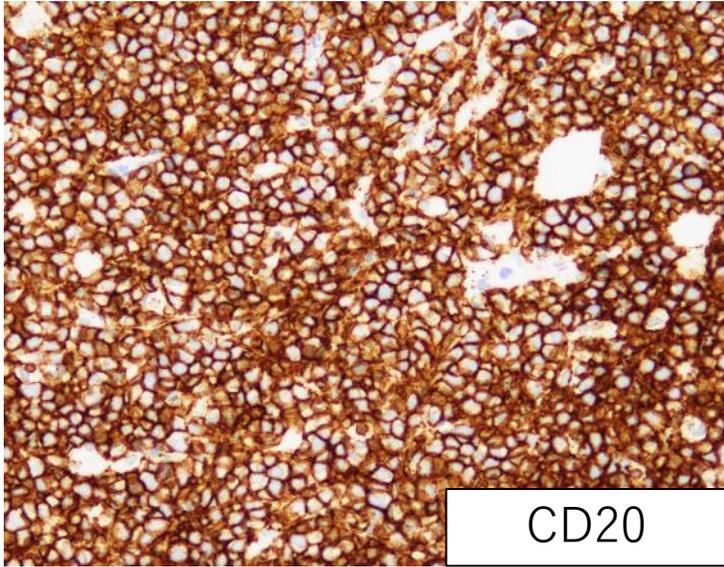
左鎖骨下リンパ節の針生検を施行。悪性リンパ腫総合解析READsystemへ提出し、上記診断となった。

組織像



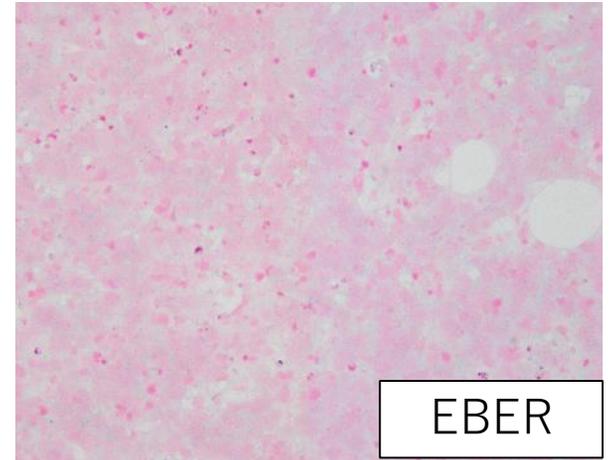
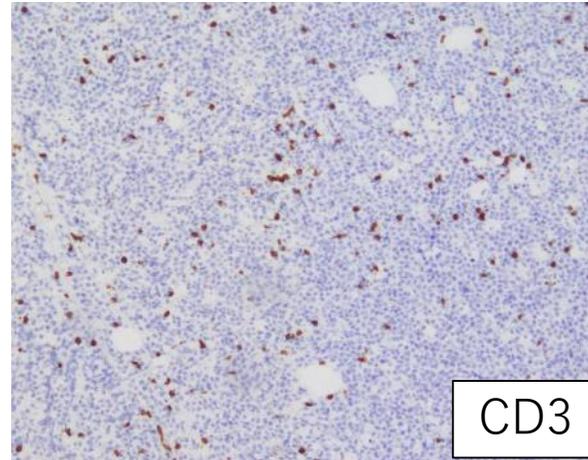
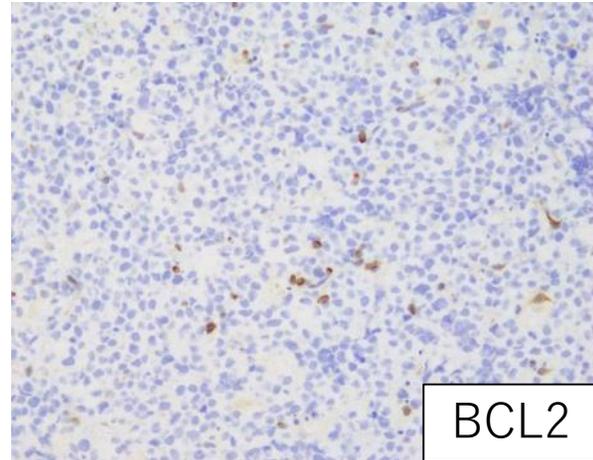
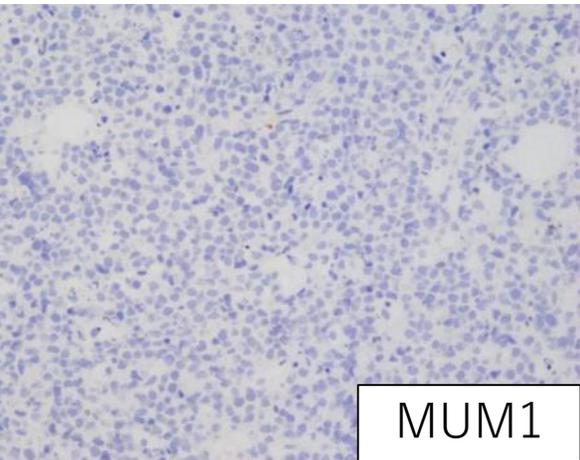
リンパ節標本で、starry-sky patternを伴って異形の中型リンパ球がびまん性に浸潤、増殖を示す。フローサイトメトリーでは、CD20(+)CD10(+)lambda(-)kappa(+)CD22(+)CD19(+)の異常細胞集団を認めた。

免疫組織化学染色



- CD20 : (+)
- Ki-67 : ほぼ100%
- BCL6 : (+)
- cmyc : (+)
- CD10 : (+)

免疫組織化学染色



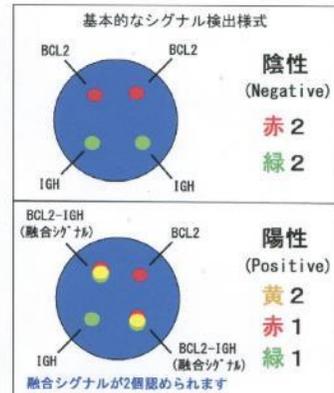
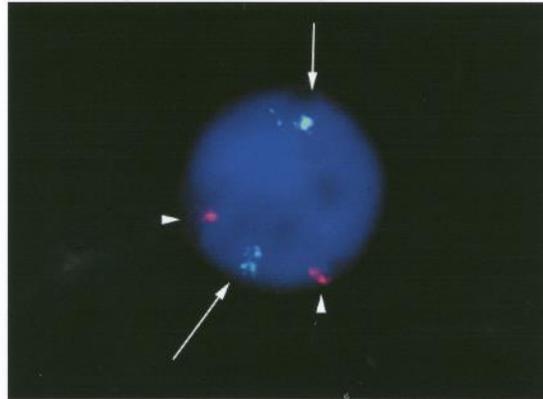
MUM1(-)、BCL2(-)、CD3(-)、EBER(-)

遺伝子解析 (IGH遺伝子再構成 ≪ PCR ≫)

VH(FR1)/JH	VH(FR2)/JH	VH(FR3)/JH	DH1-6/JH	DH7/JH
-✖	-	+	+	-

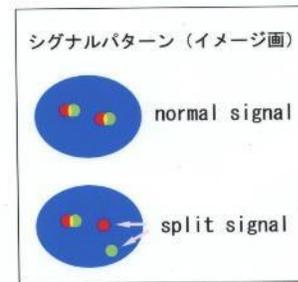
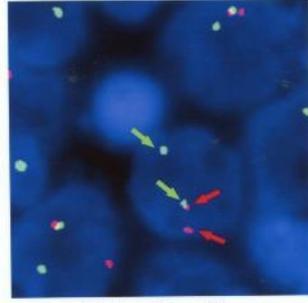
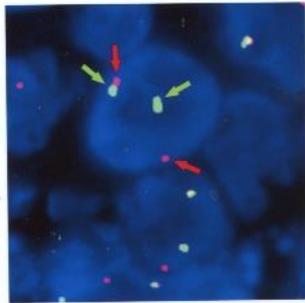
2つの領域でIGH遺伝子再構成を認めた。

染色体検査 (BCL2-IGH[t(14;18)転座解析])



14;18転座によるBCL2-IGH陽性細胞の存在を疑う所見は認めない。

c-MYC (8q24) PS-FISH検査



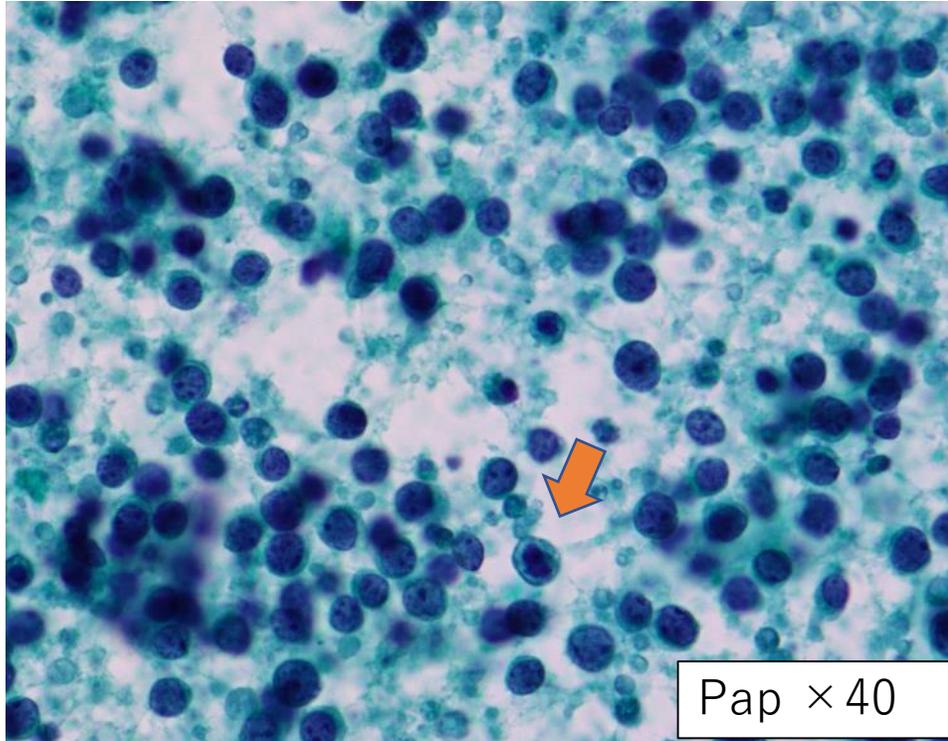
c-MYC 遺伝子領域内の分断を示唆する所見を認めた。

以上の解析結果より Burkitt lymphoma と最終診断された。

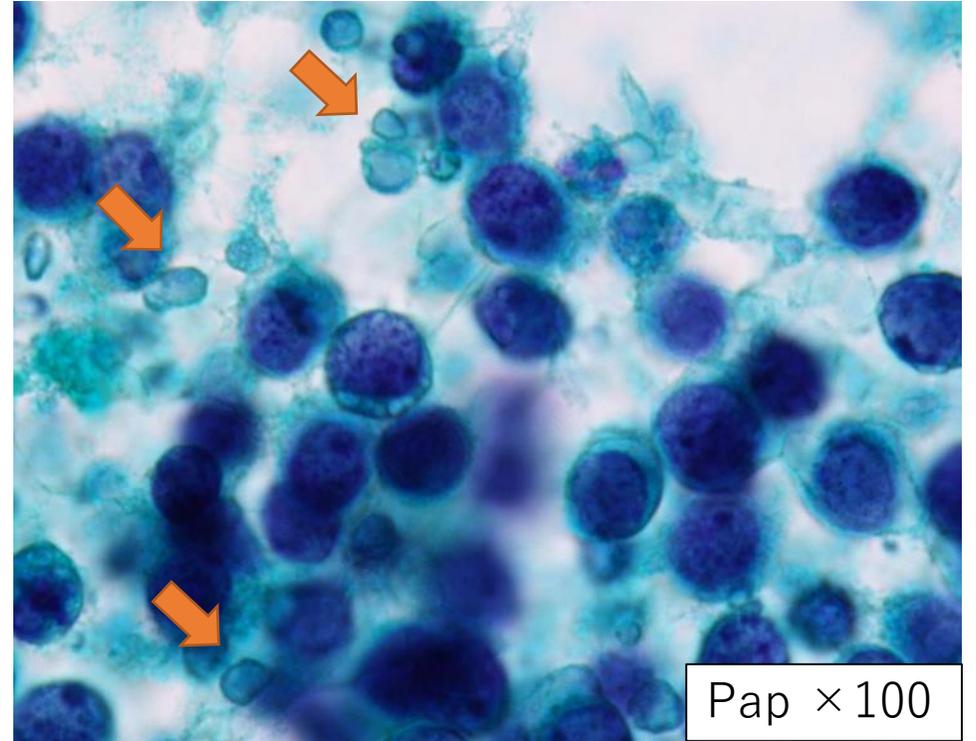
Burkitt lymphoma

Burkitt lymphoma (BL) は中型のリンパ腫細胞がびまん性に単調に増殖する悪性度の高いB細胞リンパ腫である。節外病変が一般的であるが、節性も一定程度見られる。頻度は全リンパ腫の1%程度とまれである。アフリカに好発するendemic型、非endemic型、免疫不全関連型の3型がある。日本では非endemic型がほとんどで、EBVとの直接の関連はない。病理形態像は、中型細胞がびまん性に増殖し、背景にはstarry sky appearanceと呼ばれる核片を貪食したマクロファージが散在性に見られる。核は類円形でクロマチンは細顆粒状、3~4個の核小体を持つ。多数の脂肪滴を有し、細胞診で明瞭に観察される。胚中心B細胞由来であり、CD10、BCL6が陽性、Ki67は通常100%に近い。BCL2は陰性ないし弱陽性。90%程度でMYC転座を有し、その転座相手は基本的には免疫グロブリン (Ig) 遺伝子である。

鑑別ポイント

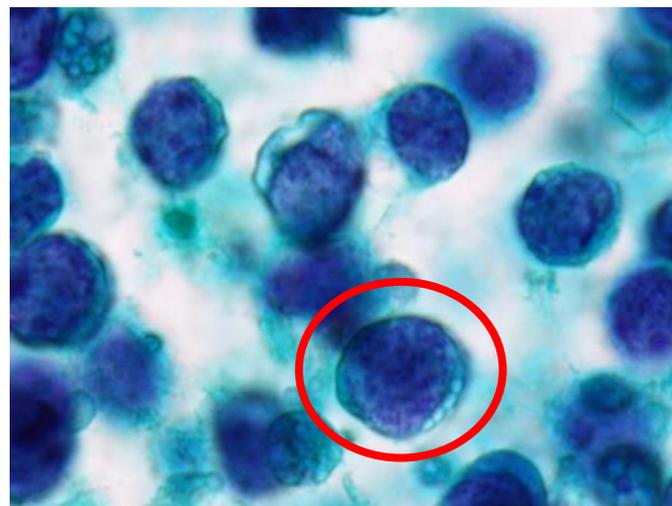
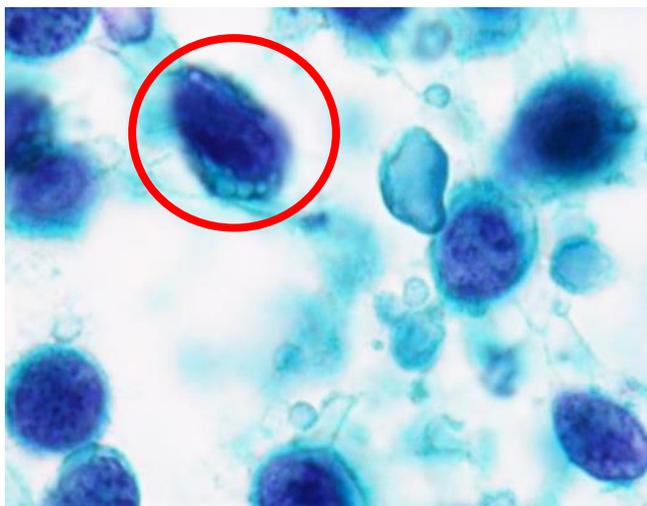
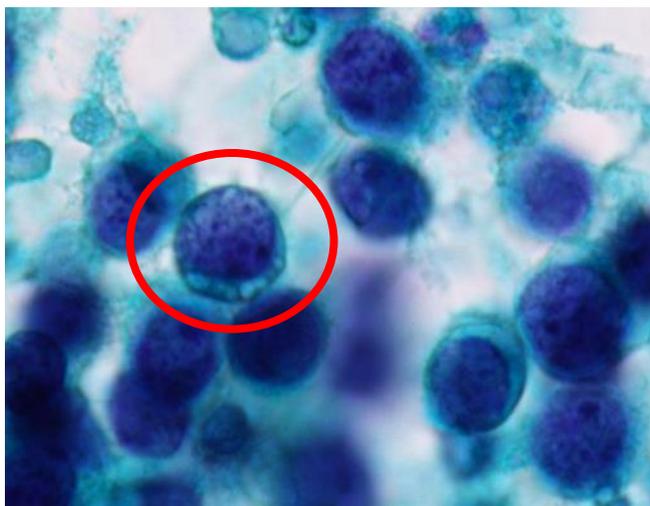


腫瘍細胞は中型のリンパ球系細胞で、単調に出現している。明瞭な核小体が1～数个見られる。今回の穿刺吸引細胞診では貪食組織球は観察されなかったが、核分裂像（矢印）が確認され、増殖能の高さがうかがえる。

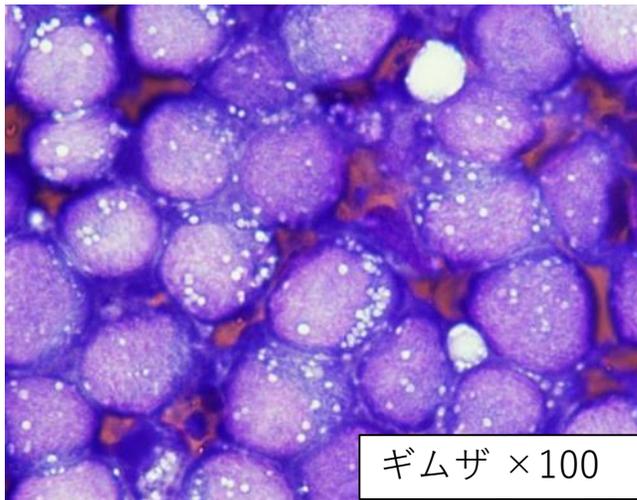
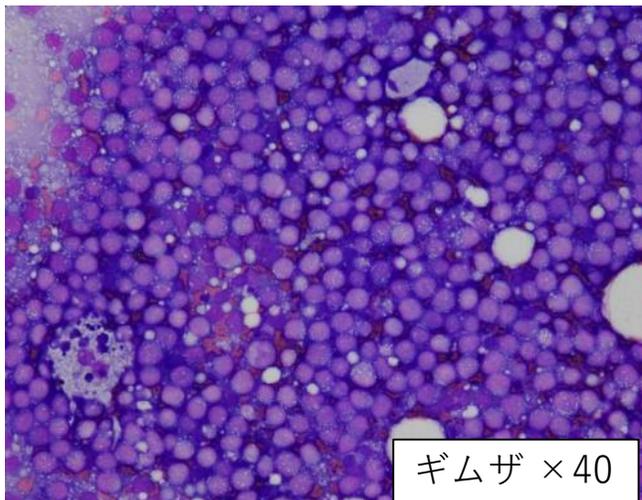


背景には無構造蛋白質物質（lymphoglandular body）（矢印）が見られ、リンパ球系の腫瘍細胞であると推測される。壊死物質ではないため、肉腫系との鑑別は可能であったのではないかと考える。

鑑別ポイント

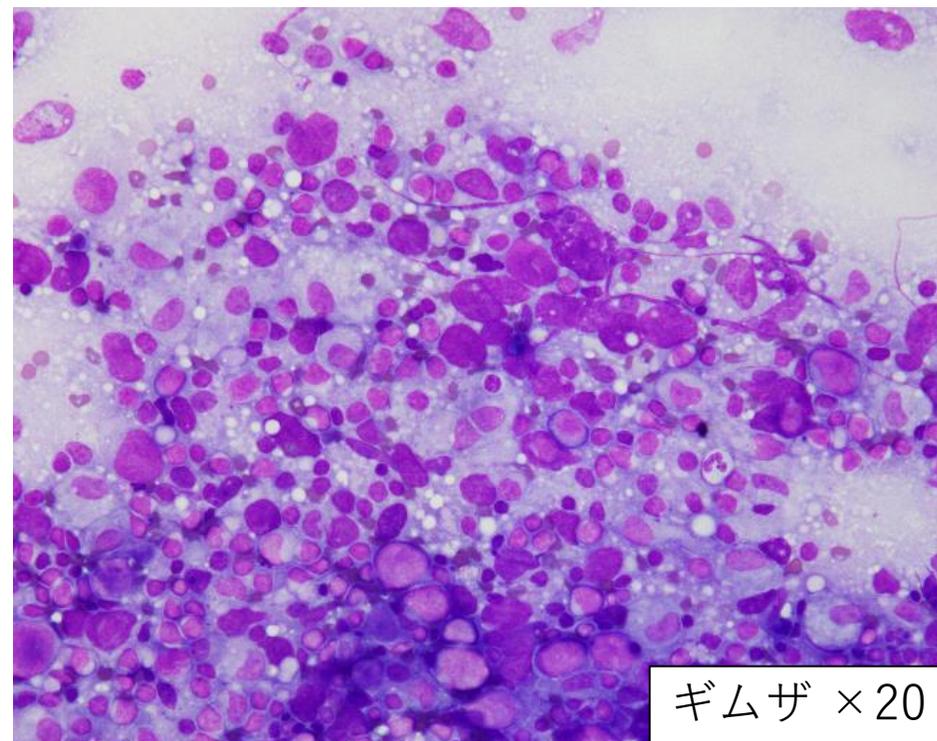
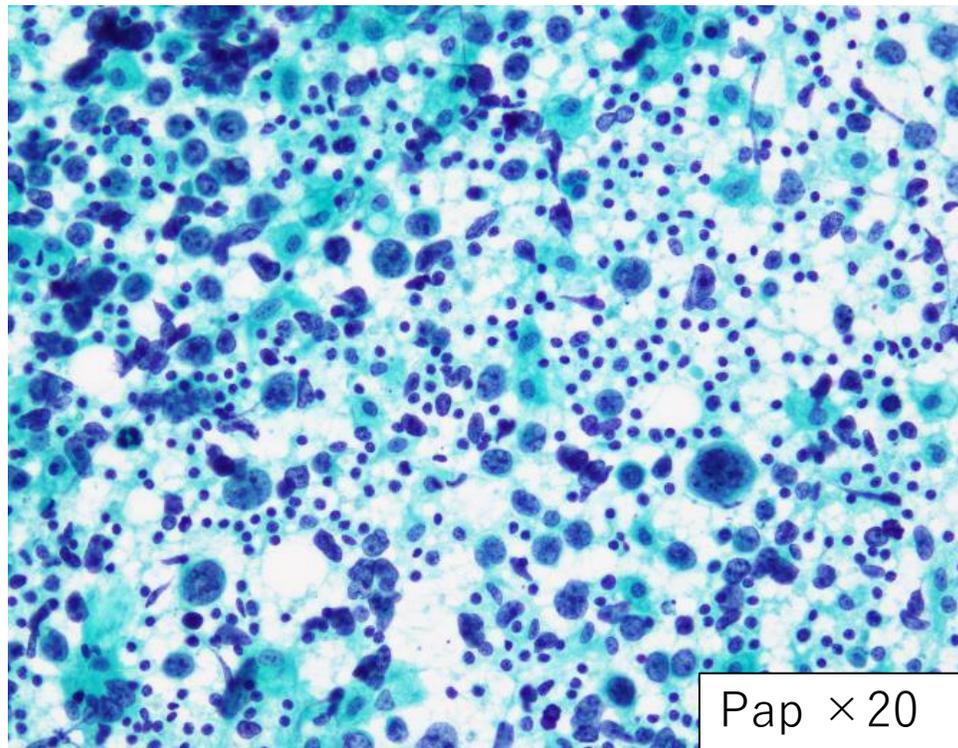


(Pap ×100)
細胞質を観察すると、脂肪滴と思われる粒状の物質 (○) が、少量ではあるがパパニコロウ染色でも確認された。



リンパ節針生検採取時にスタンプ細胞診を施行。その際のギムザ染色である。中型のリンパ球系の細胞がstarry-sky patternを示し出現していた。ギムザ染色にて特徴的な多数の脂肪滴が明瞭に観察され、BLの可能性があると鑑別にあげることができ、ギムザ染色の有用性が示唆された。今後、耳鼻科系の穿刺細胞診の際にはギムザ染色をできるだけ作製するようにしたい。

鑑別ポイント



Diffuse large B-cell lymphoma (DLBCL) の一例のパパニコロウ染色とギムザ染色である。明らかな大型リンパ球の腫瘍細胞を認める。核異型は強く、BLとの鑑別は可能と考える。BLとDLBCLの鑑別は治療方針の決定上きわめて重要である。細胞診で組織型をある程度絞り込むことにより、診断の一助となるよう努めたい。